
バイオトープ

井上 謙 聡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビオトープ

【Nコード】

N8776A

【作者名】

井上讃恥

【あらすじ】

生きることが面倒だから自殺しようって考えた。色々やってみただけど死ねなかった。で、樹海に行った。そしたら樹海の中に！？死を希むキシが、様々な出会いや体験をして、自分を創造していく過程を描いたファンタジックアドベンチャー。未完。

第一章

生きるとは何か。人は何のために生きるのか。そんなこといくら考えてもわからん。しかし、なぜ生きるのかという理由がないと俺は生きてはいけないと思う。何となくではやっていけんよ。俺ひとり生きてるだけでも、きっと地球は迷惑してる筈だ。生きてても、何も無い。生きていたって、何も無い。が、別に死にたいとも思わん。でも、毎日が、というよりも、十五分とかそんな間隔で面倒くさいと感じるのだ。だから、だから、まあ、やっぱり、死んでみようかな。生きるか死ぬかだったら、やっぱり死ぬだね。はい、きーまった。そんなノリで自殺やってみました。

遺作

「流行りだから自殺するわけではない。断じてそうではない。捻くれているわけではない。」誰への弁解なのかはよくわからんが、ぶつぶつと唱えつつ、オーソドックスに風呂場に行く。蛇口をきゆうと回し、カミソリを探しだした。T字タイプのカミソリを4本ほど並べてみる。ざくつといけそうなものはこの家には見当たらず。そうだ。遺書でも書こうか。

「僕が自殺するのは、流行りに乗ってとか、そんなんじゃないんです。

断じて違います。

そして僕は捻くれてはいません。

キシ
「

一体誰に向けて書いたのか、この遺書に何の意味があるのか、何よりも自殺って流行ってるのか、全く不明で腹が立ってきたのでくしゃくしゃにしてT字の隣に添えた。そんなもの作成するくらいなら、気色の悪いニューキヤラクターでも描いて置いてあるほうがよっぽど面白みはあるな。ということを描いてみる……

完成。試行錯誤に錯誤を重ね、気づけば2時間半も経っていた。生きるって素晴らしいなと感じた一瞬。この左手が生んだキャラはなかなか気色が悪い。そして愛嬌がある。何よりも度胸が売りだ。二十二歳の男が描いたとは思えない幼稚さ。実に爽やかだ。健やかだ。遺作に相応しい。さあ、首吊ったろ。吊るか。

意外と紐を掛けるポイントって少ないもんで、死に場所に悩む。「カーテンレールでもいけるかな。」と、最後の独語を。納戸から持ってきたナイロンの紐を、しゃんしゃんとレールに巻きつけていざ。

とっ・・・とっ・・・とっ・・・とっ・・・とっ。鼓動が速く、大きくな
って鼓膜をリズムカルに叩く。両足がぶらんと垂れ下がった時、目
に飛び込んだのはあの愛くるしい遺作。ああ、名前付けときゃ良か
ったかなあ。てなことも考えられなくなってきた。グッドバイ。こ
の世のすべてのものよ。

そのとき、玄関のドアが開閉した。母だ。タイミング悪く、母親が
帰宅したようだ。ただいまも言わずにすいすいと死に場所に入っ
てきて、宙ぶらりんの息子を発見した。一瞬時が止まり、またすぐに
動き出した。

遠ざかる意識のどこかで、乾いたゴングの音が響き亘った。まず
は左頬に力いっぱい鉄拳。吊られた体はサンドバッグのように揺
れ、すぐさま怪力女に引きずり下ろされた。瀕死の体に容赦なく拳
と罵声が降り注ぐ。

「こらキシい。お前が死んだら私の老後は。私の老後はどうなん
だ。お前の親父が自殺してから女手ひとつで食わせてやったんだ。
逃げる気か。私を楽させるのがお前の義務だ。そんなバカな真似す
る暇あったら仕事探して来いよ。精神的に死ね。しゃくれキシい。」
だつてさ。余計消えなくなる。憎たらしい女だ。でも心のどこかで
この人のことを大切に思っている。認めたくはないが、それは認識
しているアンビバレンス。母親は遺作を手に持ち、「これの名前は
？」と、半分の笑顔で尋ねた。

ポケットに入ってたただけの小銭で、海沿いの駅までの切符は買え
た。数年前までは友達や恋人とよく行っていた海。そこで死ねたら
きつと気持ちが良いだろう。まあ死ぬに気持ち良いも悪いも無いか。
電車の窓から見える懐かしい風景。「次はあ、アサヒ、アサヒで
すっ。ミヤネ、オキタへは後の急行が先に到着致しますっ。次の
駅でお乗換ええ下さいっ。」お決まりの車内アナウンスを車掌と同
時に言ってみる。向かいに座っている子連れの若奥様が、俺のほう
をちらっと見てから隣の車両へ逃げていった。不審者扱いなら慣れ

ている。

アサヒ駅から徒歩二十分。朝霧岬から見る夕焼けは格別である。ここは日の出の名所であるが、俺は夕焼けの方が好きだった。低い木々に落ちていく夕日と、ダークに染まっていく海に伸びていく影。今も丁度、俺の影は海に飛び込もうとしている。朝霧岬の絶壁は自殺の名所でもある。ベタだったかなあ。あつ、飛び込むときって靴脱ぐんだっけ。なんて考えながら地面を蹴った。内臓がぐいと喉を押し上げる感覚が動悸を隠し、瞬間的にフグリを縮ませた。最後に浮かんだイメージは、あのニューキャクターと母親の半分的笑顔だった。

……波の音と妙な雑音が聞こえる……。まったく運がない。意識を取り戻したら、浜辺でウエットスーツの白髪じじいに説教されていた。気持ち良く死なせてやろうという優しさがないのかい。いい迷惑だ。「生きていたらいいことがきつとあるんだ。親から授かった大切な命だろ。みんな悲しむぞ。お前は弱い。逃げるな。」なんて全然ここに響いてこない言葉を延々と聞かされる。だからなんなんだと言ってやりたいが、議論する気力すら無い。とにかく寒さで震えがとまらないのだ。生きてる証拠ですね。

ウエットじじいがくれた万札で、自宅の最寄り駅までの切符は買えた。沢山の釣り銭は、今の俺にとっては意味をなさないものだが、とりあえずケツポケットに詰め込んだ。海水臭い、ぐしょ濡れ男の半径十二メートル以内には、誰ひとりとして入ってはこられない。俺ゾーン。もちろん車両変更者は続出した。ああそうさ、不審者扱いなら慣れているさ。外の景色を見ようとしたって暗さでわからないのさ。情けないぐしょ濡れが窓に反射して見えるだけなのさ。モリムラ キシ、二十二歳、無職。

ただいまも言わずに玄関をぺたぺたと通り抜け、生還。人気の無い

真っ暗なりビング。なんとなくテレビのスイッチを押してみた。照明の無い部屋で、無造作に置かれたT字カミソリ、ナイロンの紐やキャラクターの描かれたメモ帳が、テレビ画面と連動して淡くぱちぱちと光っている。この部屋の中でじつと立っていると、海水がまとわりついた不快感や、体温が徐々に奪われていつていることも自分とは関係ないことのように思えてくる。国民放送のナレーションがぼやっと耳をかすめた。

「二十二年前から約六年続いた自殺ラッシュは、人々の心やわが国の経済に大きな傷を残しました。近年でも自殺は、悪性新生物に続き、死因の第二位をキープしています。調査の結果、自殺ブームで死んでいった人たちの子供世代が、自ら死を選択するケースがかなり多いことがわかりました。」

タイムリーな話題だ。まるで俺のために放送されてるみたいだ。なんて思ったが、あのニューキャクターが視界に入った瞬間、国民放送は遠くへ消えていった。気色悪くて幼稚な絵の横に、崩れた字で「マルちゃん」と書き足されていた。それは我が母の筆跡であった。「マルちゃん」とは、母「マルハ」のニックネームである。どこことなく、母「マルハ」とこのキャラとは似ている部分が沢山あることに気づいた。なにやら甘酸っぱい、切なさのような感情が、体毛の一本いっぼんを順序良く逆立っていった。喉が細かく痙攣し、鼻の奥辺りから生温い何かが滲み出てくるような変な感情。「母を悲しませたくない。」率直に思った。あの低い声のナレーションは再び、さりげなく耳元に近づいてきた。

「……首吊り……飛び込み……樹海……。」

樹海か。できれば短時間で息を引き取れる方法を選びたかったが、これしかない。やはり今の自分に「死」という選択肢は避けられない。ならばマルハを苦しめることも避けられないが。最も今の自分に相応しい自殺の手法は、「樹海でひっそり野垂れ死にコース」だろう。とりあえず服を着替えて、ジーパンのケツポケットに「マルちゃん」を詰め込んだ。今、俺は生きる死人になった。なんとなく

世界が変わった気がしたのだ。

探検家 A

この国最大の樹海に着いたのは、あれから二日経った日の早朝。薄く朝もやのかかった国道は、十五分に二台ほどトラックが通り過ぎるのみ。周囲に民家などは無く、深い森のはじまりが延々と続き、あちこちに「もう一度考え直して」みたいな意味不明の文句が書かれた看板が立っている。そんな中で、ぽつんと人間が立っているのはかなり不自然に思える。いや、そう思っているのは俺だけか。国道を通るドライバー達は、俺にまるで無関心だ。まるで、こんな光景は日常茶飯事だと言わんばかりに。確かにこの樹海は、誰もが知る自殺スポットだ。いつぞやのブームの時にも、この樹海の奥に消えていく人が後を絶たなかったという。ほら、目の前にも俺と同じ様なことをしようとしてるバカ男がいる。

嫌な偶然だ。まさか自分が自殺しようとしてるときに、自殺しようとしてるやつと出会うなんて。超有名スポットなだけあって人気があるのだな。しかしこの男、妙な格好だ。今から登山しますって感じの服装に、パンパンに詰まった特大のリュックサック。おまけに虫除けスプレーを体にふりまくっていやがる。本当にこいつ自殺志願者なのか。探検家にしか見えない。ああ、そうか。こいつは探検家だ。何かの調査か宝を探しに来たのだ。こっちに気づく前に早いこと消えてしまおう。

「いやあ、さすが自殺の名所。人気やなあ。お前もここで死ぬ気なんか？」

畜生。探検家に発見されたじゃねえか。お前もってことは、やつぱりこいつもここで生を終えるつもりだったのか。変なやつに捕まった。見た目も腹立つぐらい異常だし、フレンドリーなところがまた気持ち悪い。無視だ。こんなやつは無視だ。さらば探検家 A。

「お前どっから来たん？名前は？何歳？何で死のうと思ったん？」

俺はイクジ。二十五歳。だいぶ西のほうから三日半かけて来てん。いやあ心強いわ。虫除け振るか？いらんか？ま、とりあえずまっすぐ奥行こか。」

まとわりつくな。まさか行動を共にするつもりでいるのか。「キシがパーティーに加わった。」勘弁して頂戴。ここは無視で貫くのだ。そのうちどっかへ行くだろう。無視だ無視だ散れ散れ。

樹海の中は想像以上に不気味で、空気が生温かい。深い霧が行く先を隠しまくっている。これから死ぬつてのに、先へ進むのが不安になるぐらい何か怖いのだ。それに足場は悪い。ちよつとでも気を抜いたら足をとられて倒れてしまいそうだ。

「旅人よー、ひーきーかーえーせー。うへへへへつ。森の精です。うへつ。うへへぶへえ。」「うーさーぎーおーいしーかーのーやまーハツハアー。」「あ、ロープが樹からぶら下がってる！ま、まさか、ででーん。ぶほつ。」後ろから憑いて歩いてくる男が、くだらないことを言ってお下品に笑っている。もうかれこれ三十五分も不快な独語独笑が後をついて来ている。ふとその男に目をやったら、おむすびをお下品に食っている。「ピクニックかよ。」って思わず突っ込んでしまった。「ぶへへつ。ナイスツツコミ。」米つぶをあちこちに飛ばしながら探険家Aはお下品に笑いやがる。さっきのツツコミを切り口に、気になってたこと「死にに来たんじゃないのかわよ。」って訊いてみる。後ろにいたやつが、ささささと早足でやってきて真横に付けてきた。

「俺に興味津々つてか。うへへ。お前人見知りするタイプか。やつと勇気をだして訊ねてみましたってなかんじゃなあ。よーしゃおせたる……」

こつという余計なことを言うやつは苦手だ。訊くんじゃなかった。声を掛けたのが最期。こいつ絶対死ぬまで付きまとうぞ。俺の体が米つぶだらけになるくらい、お下品にじゃべりまくるんだ。

「まあーあれよ。今って結構自殺流行ってるやん。俺の場合はブームに乗ってって訳やなくて、てかブームに乗って死ぬやつはおらん

かあへへへ。自殺したくなるほど腐った現代ってことやるね。俺もその腐った現代に絶望を感じてるひとりの少年少女ってわけ。」

「……（認めたくはないけど、なんとなく俺と似てる）」

「……ってオイ！そこはつつこまへんのかいな！少年少女で！自分でゆうとくわ！んで、お前が気になって気になってしやあないのはコレやる。なんで荷物が多いんか、なんで腹ごしらえしてるか、なんで白髪をむらさきに染めるおばあちゃんが多いんか、って関係ないがな！うへへっ、へへっ、うへへぶほっ！ぐほっ、ごがっ！」白銀にひかる米つぶが飛び散った。こつちを向いてむせたまんだから、思ったよりもはるかに早く俺の体は米つぶだらけになった。「汚ねっ」とっさに払い落としたが、払い落とさなくてもこの先メリットにもデメリットにもならないことに気づいて手を止めた。

この先、どうなるんだろう。ひたすら闇雲に歩きまくっているが、何の為に歩くんだろうか。そうだ。俺の亡き骸が見つけれないくらい深くへ入るためだった。それよりこいつは何の為に俺のあとをついて来るんだろう。鼻の奥の米を取り除こうとして、ぐううと鼻か喉かを鳴らしながら啜っている珍奇な男イクジ。

「こはっ。ぐうう。こはっ。ずすっずすっ。ああ……すっ……。取れたわ。あー災難や。そやそや。お前の気になってるおばあちゃん髪の毛ってちゃうがな。俺の格好な。まあ死にに来たんは死にに来たんや。自殺しにきたんやでー。せやけど。け、ど、もし。なんかの拍子で生きて出られたとしようや。出られたとする。ほつたら俺に運があるってことになるんとちゃいますかオイ。わざわざ死にきてわざわざ生きて出る。神の御業やで。俺は死んだらあかん人やってんな、めでたしめでたしっちゅうそれに賭けてるのよ。俺は。」うん。言っていることは理解できる。ただ、死にに来たのではなく、生きて出る気満々なのが荷物の大きさからわかる。俺に付きまとう理由はわからないが。兎に角やっぱりこいつは探検家Aだ。自分の人生探検家だ。

「じゃあお前と俺とは目的が全然違うな。じゃあ頑張れよ。生きて出られるといいな。」

「待てーい。俺に付き合え。いや、付き合ってくれ。寂しいねん。な。こうやって出会えたのも何かの縁やで。俺の運のひとつや。頼む、このとおりや。」鼻の下に米つぶを光らせたイクジが、両手を擦り合わせて軽快に足踏みしながら硬く目を瞑っている。

「俺が断るのも運のひとつだ。それに俺は奥に進んで行くから。」

「うあー。そうきたか。そないゆうても付いて行くで。なんせ方角もわからん。これが奥に向かって歩いてるかどうかさえわからんぞ。な。最期の人助けやと思つて。」

こいつは自分に自信がなくて、自分に責任がもてなくて、人を当てにして、それでいて自己中心的で、そんなやつなんだろう。まあどうせこの命ももうすぐ消えるんだ。何でもいいや。黙って奥と思われる方向に歩き出した。イクジはにやっとして後ろを歩いた。深い霧がだんだん晴れてきた。

どら焼き

「名前は。」「キシ。」「カツコええ名前やなあ。ほなキー坊て呼ぶわ。」「……」「で、キー坊よ。何で死のう思ってるのよ。」「イクジと同じようなもん。」「ふーん。腐ってるよねー。実に腐ってるよねー。」なんて会話をしながらも、二人はずんずん歩いていく。進めど進めど不気味な樹海の風景は変わらない。日が高くなってきたせいも霧は薄くなり、かなり先まで見通しが利くようになってきた。日光が射してもこの植物たちはやけに緑が黒ずんで、茶色がかっていて、決して和める緑色ではない。「ちよ、ちよい休憩しよや。」イクジが座り込んだ。確かに歩きっぱなしで疲れた。イクジは馬鹿でかい荷物のもつと疲れてる筈だ。しかし、ここでこの男に従っていいは主導権を握られてしまうような気がして嫌だったので、無視して歩き続けた。

「おいおい、相棒さん。待っておくんせえ。はああ。」一度下ろした腰をもたげたイクジは、よろめきながらも早足で付いてくる。何が主導権だ。さつき何でもいやって思ったところなのに。とは言っても何か腑に落ちないんだ。しかし……すぐ手前に行く手を阻むかのように、直径六十センチメートル程の幹が横たわっている。休憩するか。苔やら蔦やらがびっしりついたそれに腰掛けた。イクジは向かい合うようにして地面に腰を下ろした。

「ヒルメシ、ヒルメシ、ハラヘッタ、メシクワセー」リズムミカルに歌いながらイクジはリュックを開けてごそごそとまさぐり、アルミホイルの包みを取り出した。嬉しそうにその包みをめくり、顔を出している薄く茶色がかつたゆで卵をお下品にほおばった。ぐつちやぐつちやと汚らしく音を立て、うまそうに食っている。「これな、夕べ見ず知らずのおばはんがくれたんや。世の中すてたもんちやうなあ。ふごふご。キシも食うか。しょうゆ漬けや。うまいぞ。」確かに空腹ではある。正直食いたい。しかし食ってしまえばピクニッ

クだ。おれはピクニックに来たんじゃあない。こんなところで栄養素を摂取してどうするんだキシ。でも今だけ、この一瞬だけピクニックだ。「ひ・・・ひとくちだけくれよ。」「・・・あん、もう食ったぞ。「迷ってる間にタマゴちゃんはお下品な胃袋に収められたい。微妙な腹立たしさと恥ずかしさを隠す為にちよっぴりはにかんでみた。「 shouldn't. コレ食え。「差し出された魚肉ソーセージをぐつちやくつちやくと激しく咀嚼した。

イクジはまた大きな大きな不思議な不思議な袋をごそごそといじりだした。

「何が入ってるんだ。「この男は謎が多い。悔しいが興味津々なのだ。

「はっはあん。俺に興味津々ってか。キー坊くんよ。一部だけえ、ちらつと見せたる。「いちいち腹の立つやつだよまったく。思いながらも、何が出てくるのかとリュックの口を注視してしまっている。「まずは・・・」と取り出されたのは、真っ赤な色した歯磨きセット。「これはですねえ、このキャップをケツの方に差し込むとお歯ブラシは長くなり、なんと！ケースはそのままコップとして使用できるというニュータイプ。画期的でしょう。うへへ。うへへへ。「なんじゃそら。こいつはピクニックに来たのではない。完全に旅行気分でいやがる。拍子抜けだ。全身の力が抜けるよ。ほんと。「お次は・・・」もういいよ。興味が失せた。やめてくれ。しかしイクジはにやにやしながら紹介を続ける。「ポータボウ・ミュージック・プレイオアだあつはっはっはっはー。「えー、このイヤーホンを耳の穴に突っ込みましてえ、再生ばちっとな。「樹海の中で目を瞑り、微笑みながら左右に体を揺らして音楽に浸る姿はとんでもなく場違いである。蹴り飛ばしてやりたい。樹海の外まで飛んでいくがいい。

「あーええ歌うたいよるわドラヤキーズ。ちよつと聴いてみよし。「耳くそがこびりついてそうないヤホンを俺の耳にはめこみ、イクジが言う。「こいつら俺のツレなんやけどな、歌詞がええねんほん

ま。名前はものすごダサイけどな。ドラヤキーズてなんやねん。うへへ。」

聞こえてくるのはシャカシャカと乾いたリズムギターに単調なエイトビート。半テンポづつもたつくベース。目茶苦茶にはずれたメロディー。ユニゾンにもならない野次のようなコーラス。不快な音に顔をしかめた。とりあえず音は無視して言葉にだけ集中してみる。これが、びっくり。未曾有の衝撃だった。

社会に対する批判と、自尊心を満たすような言葉を並べるだけの歌詞。嫌なものから目を背けて逃避しているだけのようにも聞こえるが、その中にどうしようもない切なさ、揺るがない明日への希望が見え隠れするのだ。一曲も聴き終わらないうちに、もう完全にドラヤキーズの虜になってしまっていた。不快だった音も歌詞とうまく溶け合い、引き立たせるスパイスのようだ。すっかり聴き入ってしまった、遂には一周してしまっていた。そーいや、イクジは……すー、すー、ふごつ。リュックを枕にして寝入ってしまった。もう一周だけ聴こう。ドラヤキーズが感性という胃袋にずっしりと居座った。

どれぐらいの時間が過ぎたのだろう。停止ボタンを押し、イヤホンを外して首にぶら下げた。ふうふう。と大きな吐息を足元の土に吹きつける。どれほど彼らの音楽に意識を奪われていたのだろう。全十三曲。最低でも六周は聴いているはずだ。今では多くのフレーズを口ずさめるようになってしまっている。

くだらねえ くだらねえ

くだらねえ 国だ

出て行くぜ 出て行くぜ

俺達だけの 国をつくるんじゃ

特に印象に残っている一節を歌ってみる。聴くだけでもいいが、自

分の喉を揮わせてみるのも気持ちの良いものだ。ああ、もつと早くにドラヤキーズに出会っていれば何か違ったかもしれない。こんな所に腰を降ろしていることなどなかったかもしれない。しかし、ここでしかこの音楽と出会うことはなかった。死のうとしなければ、出会うことはなかったのだ。畜生。なんだこれ。もやもやしてきた。もんもんしてきた。

「くだらねえくだらねえくだらねえ人生だ！」どうしようもなく叫んだ。か弱い怒声はすぐにくすんだ緑に吸い込まれていった。気が付けばもう紫の夕暮れが樹海を包みはじめていた。

先程の叫び声でイクジは漸く目覚めたようだ。「ああ。なんやお前でつかい声出して。くだらねえ人生でゆうたか。歌詞間違えてんぞ。ドラは絶対そんなこと言わへんぞ。んんう。」だるそうな鼻声で、背筋を伸ばしながらイクジが言う。今は何故かこの男の存在が鬱陶しくて仕方ない。視界に入れないように目を瞑ってうつむき、声が聞こえないように耳を手の平できつく塞いだ。でも嫌な声は聞こえてくる。

「全部聴いたんか。何でそんな暗い顔してんねん。気に入らんかったんか。」

返事はしたくなかったが、そこだけは言っておきたかった。

「最高だったよ。」

「やる。やる。最高やる。いやあお前にもわかるかあ。嬉しいなあ。いやいや、最高やったらもつとサイコーみたいな顔しろよ。おかしなやつちやなあ。え、こら。」

「ちよつと黙ってくれ。」

「おいおい、どうゆうことやねんなキー坊。」

「変な呼び方するな。」

「ごめんキー坊。」

それからしばらく二人は黙った。俺は耳に手を当てたまま、むこうの樹に赤いカラスプレーで書かれた「さよなら」という文字を眺めている。イクジはリュックにもたれかかるようにして。何かを考

え込んではいるが、何も考えていないような、勝手に頭の中を考えが走り回っているような感覚。

あたりの風景から色が奪われていくようだ。夕暮れから夜になるうとしていく。痺れを切らしたようにイクジが急に立ち上がった。立ち上がったキシの目の前に立ったはいいが、何を言っているかわからず鼻の下に右手を当てている。この男に言わなければ。やはりこのままではいけないのだ。

「なあ、やっぱりイクジはイクジでやってくれよ。俺はどうやって生きてはいけない。死ぬんだ。ここで死ぬんだ。俺と居れば幸運は逃げるばつかだぞ。」

ミュージックプレーヤーにイヤホンのコードを巻きつけ、目の前にある手に握らせた。

「ちよ、これから夜やで。怖いやんけ。」

「俺は怖くない、死ぬんだから。生きたいくせにこんなところに来るからだ。知らないよ。」

「そんな冷たいことゆうなやキー坊。俺は別に生きたい訳とちゃうぞ。死んだかてええって真剣に思ってる。せやからここに来た。ただ、出られたら生きていけるかもって……ってそんなん今はどうでもええんや。なあ頼むわ。じゃあ一緒に死のう。な、これやったらええやろ。」

「嫌だ。イクジと居たら調子が狂う。じゃあな。」

座っていた幹から立ち上がるうとしたその時、足がいうことをきかなくてバランスを崩した。当たり前だ。ケツにできものが出来るくらい長いこと座ってたのだ。さっき座っていた部分に尻餅をつき、そのまま後ろに倒れこみ、幹の向こう側に後頭部から落ちていった。

とんつ。地面に打ち付けたはずの後頭部に異様な感触。土や、植物ではなく、さりとて鉋物でもない。明らかに動物、肉の質感。もあつと腐敗臭が鼻をかすめた。コマ送りのようにゆっくりと首をひねり、その肉が何であるのか理解したとき、今までに経験したことのない恐怖が滲み出て、爆発した。その肉は人の形をし、衣服を纏

っていた。俺の後頭部は、その仏さんの臀部に打ち付けられていたのだ。温度という概念を超えた寒さが全身と、精神を支配する。ホルモンが急激に異常分泌を始めた。次の瞬間にはもう、全力疾走をしていた。断末魔のサイレンを鳴らしながら。

死体から駒

とにかく前に、前に、ひたすら走る。とびきりの前傾姿勢で。もはや本能で動いている。ビバ、俺の本能。太い木、細い木、倒れた木、石やら岩やらえんやらや、飛んだり、避けたり、当たったり、俺の速度はマキシマム。そんな感じで、前方を阻む障害物を避けながらも最速で突っ切る。時につまずいたりはしたが、火事場のくそ力というのか、トップアスリートばりの身のこなしで体勢を立て直した。もはや今の俺に疲れとか、しんどさとか、呼吸困難とか、鼓動とかは無い。感覚が無い。精神運動すらない。前に、前に、今はそれだけ。それ以外は何も、全くもって存在しない。とにかく前に、前に、ひたすら走る。

呼吸が乱れてくるにつれ、だんだんと身体的な感覚と精神的な感覚が戻ってきた。体はもうもうと火照り、心臓が能力以上の力を出して全身に酸素を運搬しようとしている。足はもうだめだよ、はしっちゃあだめだよと言っている。しかし「怖い」という感情がはつきりと輪郭を持ちはじめている。その恐怖の感情を代替燃料にしてエンジンを噴かす。両足の声を無視するかのように、無理やりに。

感覚を取り戻していくにつれ、視界に入ってくるものも認識できるようにになってきたが、それが逆に恐怖を駆り立てるものになっていった。あちこちに骨やら、衣類やら、遺留品やらが、新旧様々に散在しているのがよく見えていたからだ。イクジと二人で歩いていた時もこんなものをちらほら目にしていたが、あの時は何とも思わなかった。あの時は何も感じなかったのに、こんなに恐ろしく感じている。それはどうしてか

あの時は死を覚悟していて何も恐れていなかったからか。

今は死を覚悟していないのか。

だから俺は逃げるように走っているのか。

しかし、一体何から逃げているんだ。

俺は何に恐れているんだ。

何が怖いんだ。

死ぬのが怖いか。

死ぬことがそんなに怖いか。

自分があんな腐乱死体に変わり果てることが。

。

否。

樹海のトップアスリートがやっと立ち止まった。大きく荒い呼吸をしている。体の先っちょから先っちょまでばくと波打っている。熱気でむしむしする。ケツも七つ八つに分裂するほど乳酸が産生されている。だが、いままで自分を支配していた恐れは、夏場の鼻くそよりもずっと小さくしぼんでいた。急激に酷使した身体をいたわるかのように、ゆっくりと歩き出し、クーリングダウン。

大股でずんつ、ずんつと土を踏みつけながら、思考を再起動させてみた。

あ。そういやイクジはどうしたろう。重たい荷物をかかえて、必死で追いかけてたんだろうな。何が起こったのかもわからずに追いかけてきていたに違いない。可哀そうに。この暗さではもう俺を探し出すことはできやしないだろう。そう、すでに日は沈み、茂った木々の隙間からかろうじて月光が覗くのみ。その月もまたスレンダーで、もう真っ暗闇に近い状態だ。今頃はこの暗闇の中、不特定の対

象に怯えながら身を震わしているんだろう。引き返してやるう。
いや。彼とはさつき決別したのだ。俺は今夜にでも闇に溶けてしま
うのだ。そして微かな月明かりに乗って、背中に羽を持ったすっぱ
んぼんの幼い少年たちが降りてくるのだ。俺はその少年たちと天に
昇って逝くのだ。すっぱんぼんで逝くのだ。だからイクジよ。君に
幸あれ。天にマシマス神様。彼をお救いくださいまし。ザーメン。
使命を果たしたこの体はもうぼろぼろで、いよいよいうことをきか
なくなってきた。手のひらがじんじんと痺れてきたかと思うと、み
ぞおちも共鳴してじんじんとし始め、ついには身体の先っちょから
先っちょまでじんじんと鳴った。じんじん、じんじん、じんじん。
ばだん。倒れた。じんじん。じんじん。じん、じん、じ、ん。サ、
ヨ、ナ、ラ

寒い。

寒い。あの世はこんなに寒いものなのか。誰か半纏か毛布を。出
来れば暖かいおしるこを。もう少し贅沢を言ったらコタツとキムチ
鍋もヨロシク。

ってあややあ。まだ、この世だ。死んじゃあ、いない。深い、森の
中。横には、屍。前にも、屍。ちよつと前にも、屍。もうじき夏だ
というのに、とにかく寒い。生きてる証拠ですね。

樹海の朝にびよびよとか、ちよんちよんとか、小鳥の可愛らしいハ
ミングなんて無い。濃い霧の向こうの方から、ギョウウエーと不気
味にしか鳴いてくれないらしい。いや、ひよつとしたらここは地獄
ってやつか。きつと地獄だ。ほら、まさに地獄絵図って感じじゃあ
ないですか。こっちに白骨死体、あつちにも白骨死体。こっちにも
白骨死体、あつちのほうには腐乱死体、あの向こうのも死体。うん。
あれはまだちよつと新しそうだな。なんて遊んでると、ちよつと新
しそうな死体がむくつと起き上がって「うーん」なんて言ってる。

さすがは新そうな死体。すごいぞ新しそうな死体。頑張れ新しそうな死体。

ちよつと待て。

後頭部に、あの腐乱死体の感触が蘇ってくる。トップアスリート復活。

「うあああああ！」

俺は何故逃げている。

今は死を覚悟していないのか。

だから俺は逃げるように走っているのか。

しかし、一体何から逃げているんだ。

俺は何に恐れているんだ。

何が怖いんだ。

死ぬのが怖いか。

死ぬことがそんなに怖いか。

自分があんな腐乱死体になり果てることが。

。

否。

死体が起き上がるという未知の恐怖に遭遇したから怖い。

「待てえ。」と新しそうな死体の声。待ってたまるものか。なんでこんな目に遭わないといけないのか。天にマシマス神様。早くあの世へ連れてって。てか野たれ死ぬ必要なんで無かった。さっさとど

つかの樹で吊つとけば良かった。まったくうつかり屋さんだこと。

「待ていキー坊。」

待てるかって。

キー坊って変な呼び方するなって。

あれ。イクジだ。

本当に心から嬉しそうな笑顔を見せつけながらイクジが言いやがる。「俺を死体扱いしやがって。びびりやのう。せやけどほんまに良かった。ま、こうやってまた再会できたことやし、仲良くやりましょ。あーやつぱり神さんっておるねんなあ。ありがたやありがたや。」天にマシマス神様。こんな形で彼を救わないでくださいまし。甚だ迷惑だ。早くあの世に連れてって。

「仲良くなんかしない。イクジはイクジでやってくれって言っただろ。俺は死ぬんだ。」

「けどお前、死ぬから何も怖いことないってゆうときながらびびりまくりやんけ。ちびりまくりやんけ。うへへへ。」

彼を早くあの世に連れてって。この上もなく腹の立つ男だ。何故この変人と出会ったのだらう。不運だ。まことに遺憾だ。だが、イクジの言うとおり俺はびびりまくりのちびりまくりだ。きつと心から死を覚悟なんかしてなかった。そうとは言っても、別に死にたくないって訳ではない。俺は死を望んでここにきた。そこは変わらない。覚悟が出来てようが出来てまいが、この世に未練があるうがなからうがここで生を終えるのだ。そこは変わらない。

「でも、やつぱり俺は死ぬんだ。イクジはここから出られることを目指して頑張れよ。」

「だからあ、目指すとかそんなんじゃないねんで。」
目の前を横切るように小さな溪流が流れている。ちろちろと美しい音を奏でている。陰気な樹海の中にもなかなかいいものがあるのだ

な。素直にそう感じた。

「ほら、そこに小川があるじゃないか。それに沿って下って行けば出られるんじゃないか。」

「そうかもしれないな。そうじゃないかもしれないな。とにかく行ってみる価値は大いにあるな。はい、キー坊もこつちな。」無理やり肩をぐつと捻られ、川を下るコースに誘導された。抵抗しようと思っただが「まあちよつとぐらい付き合えや。お前が死ぬまでな。」と言われたら従うしかなかった。

「いやあ、綺麗な川やなあ。心が和むなあキー坊よ。身体が軽くなるなあ。あー軽い軽いつて軽すぎるぞ。」イクジが一瞬止まった。

「俺のかばんあれへんやんけー！」

全くもって気付かなかつたが、あの大きな大きなリュックが無い。髪の毛をぐしゃぐしゃと前後に掻きながらイクジは「はっ」「へっ」などと口走り、随分焦っている様子である。

「ええと。いつから無いんや。ええと。」きよるきよると辺りを見渡したかと思うと、またイクジが一瞬止まった。そして遠くを見つめながら静かに口を開いた。

「おい、キー坊。もう、鞆は、ええわ。意外と早かつたなあ。ほんまのほんまに神さんはおるわ。俺はここで死ぬべき人間やなかつたみたいや。」

イクジが顎で前方を指した。その先を見て俺は我が目を疑った。

ほんの六、七十メートルほど先、もうすぐそこ。もうすぐ近くに、二つの小屋と、その傍で煙が上がっているのが見えた。

「キー坊。お前どうするよ。俺は出るぞ。俺は生きるからな。」イクジは足を踏み出した。

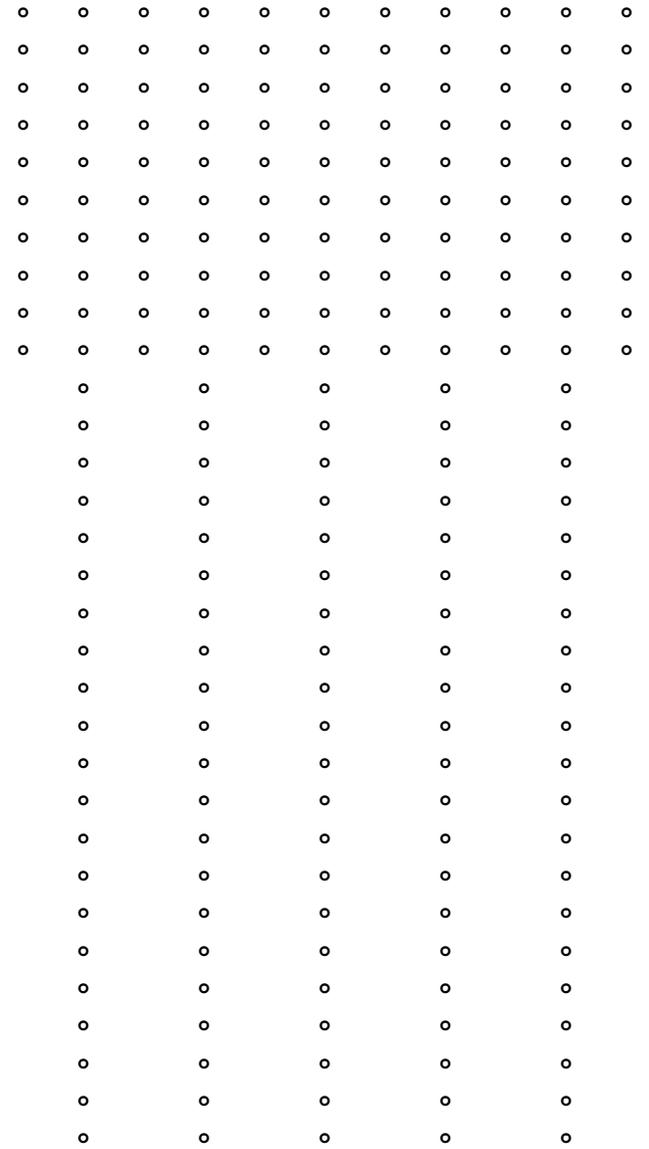
本当に樹海から抜けてしまったのか。いくら疑っても、いくら見てもあそこには間違いなく人の気配がある。俺は、俺は……。

いや、何かがおかしい。なんだこの違和感は。この小屋に、煙に、違和感を感じずにはいられない。そう思ったその時、がさがさがさ

つと大きな音を立てて何か近づいてきた。

「何やねんな。お、お前ら。」

俺とイクジは三人の男に囲まれていた。手には長い槍を持ち、ぼろぼろの服を着たおかしな格好の男たちに、鋭い眼差しで睨まれ、槍を突きつけられていた。



(有) オオツカ食品

ざらざらしている細い立ち樹の幹に、縛られている。というか樹を負んぶするようにして後ろで手を組み、両手首を硬い紐みたいな植物で縛られている。直接樹に縛られているという意味ではない。樹と、硬い紐みたいな植物によって行動を制限されている。そんなことよりちよつと見てごらんよ。右のほう、そそ。二メートルほど右ね。ほら、イクジも縛られてやんの。情けない顔してさ。ぷぷ。「俺はここで死ぬべき人間じゃなかった。俺は出るぞ。生きるぞ。」イクジがこんなことを言つてすぐ、こうなった。哀れ、というよりも、笑える。ぷ。こんな変な会社ごっこをしてるおっさん集団に縛られてやんの。情けない顔してさ。しかし、これはどういうことなのか状況が飲み込めない。

「キー坊。何やねん、こいつら。」近くで胡坐をかいているおっさんAに聞かれまいと、小声でイクジが囁く。「さあ。」ってでっかい声で返答してやった。おっさんAが振り返つてこつちを睨みつけ、また向こうを向いた。どうみてもワイシャツにスーツのズボンの、ぼろぼろになったやつ。壊れて歪んだ黒縁眼鏡。酷く痩せかけていて、頬がぼつこと凹、頬骨がぼつこと凸、奥目。なぜかネクタイは鉢巻きになっていて、ザンバラヘアの隙間からひらひらとしている。酔っ払つてそのまま孤島に流れ着いて、早7年半。みたいな感じで、哀れ。というよりも、笑える。この見張りっぽい小柄なおっさんAは他のおっさんたちから「ハンチョー」と呼ばれていた。班長のことだろうか。この会社ごっこ集団は、なんやねん。だ。

今から数十分ほど前、三人のおっさんに囲まれたとき、樹海の外に出たのではないと覚った。こんなぼろぼろの服で、意味不明な武器を持っている。見るからに遭難者のようだった。意味不明なのは格好だけでなく、このおっさん甲、乙、丙の言動も理解不能なもの

だった。

「少年たち、黙って前に進め。」背中に槍を突きつけて、おっさん甲が言った。特別に従う必要性が見出せなかったので、じっとしていたが、おっさん乙に槍をつんつんされていたイクジは、もう頭が真っ白、顔は真っ青、びびりまくりのちびりまくりで、かこかこと筋緊張させながら進んでいた。俺にも来てほしそうに目配せしたみたいだから、しょうがなく前に進んだ。

「ブチヨー、カカリチヨー、何ヶ月振りよ。」おっさん丙が変な言葉をお走った。

「春先だったかなあ、三、四ヶ月つてとこか。」おっさん乙が応えた。続けておっさん甲が「シヤチヨーのびつくりする顔が浮かぶぜ。」なんて言う。次長だ課長だ専務だ常務だ、何の会社なんだよ。とにかく、話を聞いていてこいつらはブチヨーとカチヨーとカカリチヨーだということがわかった。それはわかったが、何も掴めない。謎の秘密結社。

武装中堅役職たちに小屋のある処へ誘導された。近くで見ると小屋は、細い木を雑に組み合わせたログハウスみたいなもので、床面積が六畳ほどのものが二つ、少し離れて一回り小さいのがひとつあり、ちいさな広場を囲むようにして建っていた。その小さな広場の中央に大きな焚き火の跡があり、もすもすと煙が上っていた。俺とイクジは更に奥に連れて行かれ、この木に縛られた。「ハンチヨー。とりあえず見張りしとけ。」と小デブのブチヨーが叫ぶと、小屋の方から酔っ払いの漂着者「ハンチヨー」が長い槍を持ってやってきて、黙って俺たちの前で座り込んだ。そしてこの状態が数十分続いている。

「俺らどないなんねやる。」イクジがまた小声で言った。さあね。どうなるかと知ったこっちゃない。俺は初めから屍になるつもりでいるから、煮るなり焼くなり食うなりされようが一向に構わない。イクジはそうでもなさそうだが、それも知ったこっちゃな

い。

「あ、あのお・・・」イクジが恐る恐るハンチヨーに声を掛けた。ハンチヨーはくるつとこつちを向いたかと思うと、イクジを睨みつけてすぐまた向こうを向いた。

さつきから広場の方で声がしている。色んな声が聞こえるが、何を話しているのかまでは聞き取れない。時々「賛成！」とか「異議なし！」とかの合唱が聞こえてくるだけだ。また「異議なし！」という声が出た後、少し静かになり、また少しして中年のみすぼらしい男たちがぞろぞろとこちらにやってきた。ブチヨー、カチヨー、カカリチヨーとひよる長い馬面、浅黒い肌の筋肉質の計五人が俺たちの前に並んで立った。ハンチヨーは胡坐のままこちらを向いた。

ひよる馬が一步前に出て、後ろに手を組んで、咳払いをしてから蝉のような高くてしゃがれた声でしゃべり始めた。

「有限会社オツカ食品へようこそ。男二人で心中かね。むさ苦しいな。えー、まあそれはともかく、本日の緊急会議で決定した事項を伝える。えー、まあこれから君たちは我々の食料になります。」
「って僕たちふたり、ほんとに煮るなり焼くなり食うなりされるみたいだね。うん。」

「そんなあほなことあるかい！」イクジが焦ったように叫んだ。

「えー、君たち、死ぬつもりで来たんでしょ。じゃ、いいじゃないの。」と、ひよる馬がにやにやしながら首を前に突き出して返した。「俺は出れたら出よう思ってたんや。それにお前人殺しやぞ！そんなんしてええんか！」

「出れなかったね。ああ残念だったねえ。可哀そうにねえ。変な子たちだねえ。まあ君が我々の食肉になるってことは決まったからね。ここじゃあ警察や政治家、聖職者も居ない。まあ要するに法律も倫理もないんだよ。ここでは我々だけのルールがあるだけなんだ。まあここで殺人はノープロブレムなわけだから、えー、まあ諦めなさい。変な子たち。」ひよる馬はイクジをコケにして、いかにも楽しそうに気色の悪い笑みを浮かべて言う。

「んなあほな！クソたれが！この紐はずさんかい！ウマヅラ！」イクジがじたばたしたって馬面はただにやついているだけだ。なんとなく腹が立った。

一番偉そうにしている黒筋肉が、ひよる馬の肩にばんと手を載せて「ジチヨー、あんまり虐めてやるな。しかし左つかわの、賑やか過ぎるな。とりあえず殴つとけ。」見た目のイメージとは違って少し高めの徹った声だったからちよつとだけ笑えた。

「えー、殴つちやってもいいんですかシャチヨー。えー、まあ大事な食材なんですから今回は見合わせますよ。えー、じゃあこの辺りにしておきましょうか。えー、じゃあシャチヨーから最後に一言、えー。おねがいします。」と、歯の隙間からいしいと息継ぎをしながら、へえこらとした態度でひよる馬ジチヨーが早口で言った。黒筋肉のシャチヨーは、腕を組んでどつしりと構え、あの高くて徹った声を出した。

「そこの左つかわのお前、勘違いするな。お前は肉だ。俺たちは肉を食う。生きるために肉を食う。その何が悪い。お前らも生きるために肉を食うだろう。牛や豚は良くて人間は駄目なのか。それは人間の勝手だ。傲慢だ。生きとし生けるものの命は、皆、平等だ。わかるな。お前らは、ただの肉だ！」そう言い捨て、シャチヨーは広場の方へのそのそと歩いて行った。ハンチヨー以外の社員はぞろぞろと後に続いた。

「待てや！お前ら何やねん！」顔を真っ赤にしたイクジが、首の横の筋をびんびんに張って叫んだ。馬面のジチヨーはくるつと振り返り、後ろに手を組んで真剣な顔をした。

「えー、我々は、有限会社オツ力食品。聞いて驚くなかれ。もともとは、君たちのように自殺するためにここへやってきた者たち。しかし、偶然にここで出会い、ここで生きる術を見つけた。煩わしい法律や倫理なんかに縛られずに楽しく生きる術を。」そして顔の筋肉を緩め、またあのいやな笑顔をした。「さあ、今夜の宴の準備だ。おい、ハンチヨー、ちゃんと見張りしとけよな。」胡坐をかい

ているハンチョーの背中を軽く蹴って、軽快な足取りでシャチョーを追って向こうへ行った。ハンチョーはただ黙ってうつむいていた。今は、なんだか笑えないな。

パイオニアの菊穴から

「ほんま腹立つわ。」隣から聞こえるボヤキにわざと反応しないようにして、ゆっくりと腰を下ろした。立ったままでいるより脚はずっと楽になったが、反対に腕は苦しくなった。根っこに近いほうが幹が太くなるから、立っているときにはあつた幹と腕の間のゆとりがなくなり、その為に腕の筋が張り、ざらざらの樹の皮も皮膚に強く当たり、さらに後ろで手を縛っている紐が手首に食い込み、少し、というか結構痛かった。予想以上にきつかった。久しぶりにきつかった。でも一回座ってしまったから、もう立つのは面倒臭い。後ろで手を縛られたままで、立ったり座ったりするのはなかなか労力があるものだ。一定量の気合も必要なのだ。それに痛いのだ。きついのだ。だからもういいのだ。脚は楽。脚は楽。ああ楽だ。ああ脚が楽だ。なんて独り強がり遊びをしていたら、イクジもその手があつたか、みたいに「お。」と言って座ろうと試みたが「あかんあかんあかんあかん！」と叫んで、はあはあ言いながらもとの体勢に戻った。「手の方が楽だコース」を選んだようだ。

広場からがやがやと社員の話す音がする。こうしてほのぼのしているうちにも夜の宴の準備がされているのだろう。宴の料理として出されるのだろうから、その前に調理されるのだろうか。もしくは宴のプログラムの中に「捌く」だとか「焼く」だとかのイベントがあるのかも知れない。どっちにしる今日いっぱい俺とイクジは星になるってことだ。

「おうい。ハンチョーやあい。」イクジが変な声で呼んだ。「ハンチョー、ハンチョー、下っ端のハンチョー。人間の肉つてうまいんか。」相変わらずハンチョーは黙ってうつむいたままだ。「おいこらメガネ、何とか言えや。蹴るぞこら。」自分が殺されてしまうとわかってヤケクソになっているのだろう。壊れかけていやがる。さ

つきまでは樹海から生きて出たものだと言いでいっぱいだったろうに。壊れても仕方ないか。で、不幸にも今度は俺が標的になった。

「こらキー坊。お前はなあ、やたら暗いねん。俺がなんぼ盛り上げたかていっつもぶすうつとしやがって。面白みの欠片も無いやつちや。そんなんやから人生おもろないねん。そら自殺もしたなるわな。それにお前は周りの人間を不幸にする便所の妖怪じゃあ！」

よくわからない理屈で罵られちゃった。しかし意外だったのが「暗い」「面白みが無い」という言葉。俺はこれでも自分が面白い人間だと思っている。頭の中では最高のシヨウが繰り広げられているっていうのに、他人には理解できないのだろうか。そう思って今までの自分を振り返ってみた。俺はイクジの目にどんな風に映っていたのだろうか。

……うん。確かに一緒に居て楽しくない人間。納得。合点。俺は自分の思考の世界だけで楽しんで、それをあまり外界に反映させていなかった。周りから見れば、無口、暗い、ユーモアが無い、何に対しても興味が無さそう、体育の授業はいつも見学してそう、ティッシュひと箱を消費するのがものすごく早そう。自室のゴミ箱の中身の内訳は、ティッシュが8割以上を占めてそう。だ。間違いない。俺と接したやつは大抵そう感じていたに違いない。ああ、そうだったんだ。今になって自分の思う自分と、他人が見ている自分の大きなギャップに気付くことが出来た。ああ、今になって。ああ、俺は大馬鹿者だ。有難うイクジ、有難う（有）オオツカ食品。はい。はい。こんなことでもいーです。俺はもう死んじやうもんねー。ぷー。腕がじんじんしてきたから、ちょっと微笑んでみた。

向こうから誰か来たみたいだ。あ、あいつだ。「えー」とか「まー」とかいっぱい言うジチョーだ。

「少年たち、えー、おとなしくしてるかね。」イクジはぺぺっと唾を吐いた。

「えー、さつきシャチヨーと話し合ってたんだが、うるさい方言の君、今夜は君がメインディッシュになるからね。まあ残ったら燻製ね。そして、えー、おとなしい君は暫らくは家畜ね。まあ燻製がなくなつてから食うからね。」

「ええ加減にせえよ。お前らそうやって何人も殺して食ってきたんか。」

「うん。ここに誰か来るたびに殺して食ってるよ。しかしおかしきよねー。皆死にに来たくせに皆が皆怒つたり泣いたり命乞いしたり。まあ矛盾してるよねー。おかしきよねー。」

「おかしきのはどつちやねん。」

イクジの言葉に肩をすくめ、ふうと一息入れてからジチヨーが、

「えー、私がシャチヨーと出会つたのは七年程前、自殺する為にこの樹海に入つてうろろしてたら、人間の肉を食べてるシャチヨーたちに遭遇した。」訊いてもいないことを話し始めた。「えー、まあその時私は家畜になつただけだね。まあ気が付いたらいつの間にかオツカ食品の社員になつてて、人間と会つた皆で食つたよ。最初は不味かつただけだね、そのうちクセになつちやつてねえー、なかなか自殺志願者に会わない時はまあ辛かつたね。まあ美味そうなの社員殺して食つちやつただけだね。えー、ジヨームとかセムとか。それで、今では社員が六人になつたつてわけね。えー、まあしかしこの馬鹿ハンチヨーが不味いイモを開発したせいでね、まあ、えー、まあ余計なおしゃべりはこの辺りにしておこうか。」訊いてもいないことを、えー、まあ、ずらずらとじゃべりやがるが、えー、まあ、二人は聴き入ってしまった。手が辛いのもあんまり感じないくらい、興味津々だった。

「ハンチヨー、薪拾つてこい。」ジチヨーが横柄に言うと、ハンチヨーはすくつと立ち上がつてどこかへ歩いていった。「あいつ、あれでまあ元フクシャチヨーなんだ。あんまりシヨボいから、まあ降格したんだ。」にやつとして、ジチヨーはまた広場へ戻つた。広場からは楽しそうな歌声が微かに聞こえてきた。

午後2時ぐらいだろうか。上を見上げたらほぼ真上に太陽が見える。やたらと暑い。こういう場所って涼しいもんなだと思ってるけど、ここで縛られてるのが熱い。腕の方は感覚が変で、ひんやり。

「なあキー坊。」ぼそつとイクジが語りかけてきた。なんか可哀そうだったから「どうした？」って優しく返事をした。十秒とちよつと、沈黙があつて、イクジは話し始めた。

「俺な、小さい時から何不自由ない生活しとつた。普通に家族がおつて、普通に友達がおつて、普通よりちよつと多めに恋人がおつて、普通に学校行つとつて、普通に仕事しとつて、好きなもんも普通に食えたし、好きなことも自由にしてたし。

せやけどいつも何かおかしいって思つとつた。何か足りひん。ちゆうか、なんかおかしいねん。それに、何やつてもうまいこといかへん。いつも、俺の人生こんなもんやないって思つた。でも、どうしたらええかわからん。自分自身がどうしたいんかもわからん。考えれば考えるほどおかしくなつていつて、なーんにもおもしろなくなつて、なんや。なんや、生きてたつてしゃあないなあつて思うようになつた。そしたらもつともつと毎日がくだらん、退屈な、苦痛なものになつていく。そうなる度に、人生上向きに変えられるんは自分しかいいひんねやつて思つて、色々努力した。わざと無理して面白いこと言いまくつてみたりさ。ほかに色々考えたよ。どんだけ努力したかていつも空回りするばかりやつた。俺のせいやなくて、こんな現代が悪いんや。こんな現代とはおさらばや。いつそのこと死んだらつて、社会のせいにして、社会を呪いながら死んだらつて何回も何回も思つた。

でも、やつぱり死ねんかつた。死ぬんが怖かつたんか、いや、希望の欠片みたいなんがあつたんかな。もしかしたら、何か凄いことが起こつて、俺のくだらん毎日をぱつと変える何かが起こるんちゃうかって。待つとつた。果報を寝て待つとつた。待つとつたんやけど。

待てど暮らせど俺は悪い方向に向かって行くばかりや。このまま生きてたつてしゃあない。そない思た。

せやから、最後のチャンスやって思つてここに来たんや。けどこれ見てみい、やつぱりこうなるんや。俺はとことんあかん奴なんやであかんねん。そうゆう定めや。」

悲しくなつてきた。イクジが不憫で不憫で仕様が無い。どうしてこいつがこんな苦しい思いをしなければならぬのだ。こんな世界に憤りを覚えるどころか、ただ悲しい。イクジが弱い訳じゃない。イクジが悪い訳じゃない。この理不尽な社会が、人を苦しめているんだ。そうだ。イクジは被害者だ。そして同じような苦しみを感ぜながら生きてきた俺もまた、被害者だ。内臓という内臓を、すべてえぐり出されたような、どうしようもない同情の念が襲いかかってきた。

「同情、するよ。」もう、何て言えばいいか判らなかつた。同情つて言葉が、イクジにとってどんな意味を持っているかは判らないが、こんな言葉しか見当たらなかつた。

「おおきに。」イクジはびっくりするほど穏やかな口調で言った。こんな気持ちになるのは今までであつただろうか。人間に、俺に、こんな感情が存在することが悲しい。こんな苦しみを感ぜる能力なんて要らない。こんな世界は、要らない。

でも、もうじき終わるんだな。さあ、早くこいつを消してやつておくれ。早くこの苦しみから解放してやつてくれ。命が絶えれば、凡てが無に還るのだから。そしたら、世界が消えるのだから。何もかも、終わるのだから。早く、早く、早く。もういいだろう？

「イクジ。もうすぐだ。もうちょっとで全部とさよならできる。な。天国で会おう。」

出来る限りの優しさを込めて、信じてもないことを伝えた。

「天国なんかあるかい。」イクジはまた穏やかに呟いた。

と、思つたら急に般若のお面みたいな顔をして叫び始めた。

「いや、まだ俺は生きてるぞー。殺されてたまるかい！とことんも

がいたる！死ぬときは死ぬときや！それまで必死こいてもがいたらああ！元気がイチバーン！だあああ！」

全く救いようが無いね。馬鹿。大馬鹿。超馬鹿。馬鹿の殿堂。死んだほうが楽だったの。こうなったら死ぬまでとことん苦しみ徹しやがれ。死んでからも苦しみやがれ。阿呆。ド阿呆。阿呆のパイオニア。呆れ過ぎて、さっきえぐられた内臓がもう返ってきて、今はルンバなんかを踊っていやがる。呆れ過ぎて、笑うしかない。うへうへうへ。

「おしっこ漏れるー！によおもれえー！ほどけえー！だらあああ！御馴染み「おしっこ漏れる作戦」で逃げようってか。こいつ本気でこの状況を打開するつもりだ。見事としか言いようが無い。可笑しくて可笑しくて、もう手の感覚がやばくて、身体をもぞもぞさせながら立ったり座ったり立ったりした。もう腕をぶつちぎって走り出したいぐらいの気持ちだ。思う存分笑わせてくれ。もう頭の中がびろびろだ。全身の感覚がペるペるだ。うへうへうへ。

「キシ、お前もしょんべしたいやろ。あいつら呼べ。「こっちの方を向いてイクジがそう言うやいなや、俺の股間の周辺の湿り具合に気付いたらしく、一瞬にして般若の形相が、歡喜の表情へと変わった。

「お前漏れとるやないかい！うわーしょんべたれよっ！うへへへうへうへうへうへ。」
繰り返し繰り返し、重ね重ね、言いますが、俺、死ぬんですよ。最後まで人間らしくとかどうでもいいんです。死ぬんなら一緒にしよ。しつこいけど、そういった理由で僕は垂れ流しな訳で、ちなみに大便はまだ垂れ流してはいませんの。

「おーしー、こー。オウ、シイ、コウ。誰か来いやー！キー坊ちびつとんぞー。」イクジは嬉しそうに、俺のデリケートな部位あたりをちらちら見ながら社員を呼んでいたが、そのうち自分の膀胱の都合が思わしくなくなってきたのか、切羽詰まった様子で叫びはじめ

た。

「あれ、ハンチョーどこ行った。」騒ぎに気が付いて、やっと小太りブチョーが来た。イクジは排泄の二ーズを満たしてほしいと願い、ブチョーは困った顔で相槌を打っている。ううん。なんて考え込んでみたいだが、失禁しそうな少年をいたぶって楽しんでいるようにも見える。歯を食いしばりながら体をむねむねくねらせているイクジの顔色が、スルメイカっぽくなってきた。やっとブチョーが結論に達してくれたようだ。

「うん。食材が汚くなるのは良くないな。漏らすなよ。絶対もらすなよ。」

散々悩んだ挙句、出た答えが「漏らすなよ。」ってこのブーちゃん、相当考えることが苦手らしい。

「ちょ、漏れるから、さ、さしてえ、う、く、おねがっ、」

「えー、どうしたらいいんだ。相談してくる。漏らすなよ。うん。」

「無理・・・あかん。て。ほどいて。」

「そんなことして逃げるつもりだろ。騙されねえぞ。馬鹿野郎。」ブチョーは向こうへ行こうと歩き出した。もうイクジも脱出とかそんなことは、この際どうでもよくなってしまったらしく「ほどこんくてええから、、たのむ」と今にも事切れそうだ。自我と生理現象とのバランスって大切だね。なんて意味もわからずなんとなくの声で呟いてみた。

社会の窓から引つ張り出してもらった左曲がりのイチモツの先端から勢い良く放水して、いい顔。

「極限まで耐えて、耐え抜いて手に入れた歓び。最高です。」昇天しそうな、いい顔。ブチョーはちよっぴり聖水を浴びてしまったようで、些か不機嫌。ぽぽぽぽぽぽぽぽ。放たれた聖水が小川を形成し、とめどなく流れ、俺の前を横切る。これ、いつまで出るんだろう。ああ、和む。和むわ。

彼の放尿がもたらした昼下がりの穏やかなひと時は、彼自身のひと言がびりびりに破ってしまった。

「うほほほおおおお。む、漏れるう。う。」今出してるじゃねえか、と誰も言ってしまうぬうちに「固体の方。固体のヤツが出る。」と真つ青のイクジが唸る。ほどこいてくれ、と言われてしまわぬうちに、放水が終了したことを確認したブチヨーが、イクジのズボンと純白のブリーフを順にずり降ろした。ちっ。と舌を鳴らして、イクジはやや腰を落とし、幹にもたれたまま排便の体勢をとった。二人の男に見守られながら。

ばしゅっ・・・ぼっ・・・びちゅちゅしゅしゅしゅうう・・・
・じゅ。びびび。

「固体じゃなくて液体だったわ。えへへっ。」びちゅ・・・ぶっすーう・・・じゅ。びびび。先ほどの小川の後を追うように、泥流が俺の方へゆっくり伸びて来た。

「拭いて。」可愛く言っただけに見せたイクジに、ブチヨーはケツキックをお見舞いし、不機嫌そうに広場の方へ歩いて行った。

その時、いっぱいの薪を背負ったハンチヨーが戻ってきた。

「見張りしとけって言っただろうが！クソツタレ！」ブチヨーはハンチヨーのいるなんとかを計六、七発蹴ってから広場へ戻っていた。ハンチヨーは何も言わず、表情ひとつ変えず、死んだような眼で遠くを見ていた。このおっさんの眼は、いつ見ても死んでいる。

先つちよの雲母を

広場へ薪を置きにいったハンチョーが帰ってきて、また俺たちに背を向けて胡坐をかいた。先ほどのびちびちうんちの香りがする。

イクジは歯を見せながら、とつても嬉しそうに産まれたての下痢便をこつちに蹴り飛ばしている。砂、小石、うんちがばらばらと俺の脚に当たる。「うへ、うへへ。」ニヤニヤしながら、自分のこいた下痢便を飛ばして遊んでいる。勿論。おペニスを出したまま。パンツはズれたまま。マア痛いお人。

しかし俺は全くの無反応で貫いている。イクジはつまらなそうに足の振りを止め、うつむいて何やら考え込み出した。

暫らくして、またイクジのしんみりトークが始まった。

「法も倫理もなくなったら、こないなるんか。やっぱり人間って汚い生き物やのう。かなりシヨッキングやわ。ああ、イクジ、シヨックウ。」

「当たり前だ。人間ってのは自分さえ良ければそれで良いんだ。」

「はああ……生きる気力も失せるわ。」

「……。」

だからもうすぐ終わるって。と声を出さないうってやった。だってそんなこと言ったら、こいつはまた「まだまだじゃあ！」とか言いそうだから黙っていた。

「何でこうなるんや。ほんましんどいわ。人間ってもつと綺麗なもんやって思ってたわ。ガキは天使とか言うけど、あれ嘘やな。ガキはプチデビルや。おっきなって悪いことばかりしよるんや。渡る世間はデビルばっかし。あー怖い怖い。」

「……。」

じゃあお前もデビルだよ。と声を出さないうってやった。だってそんなこと言ったら、可哀想じゃないの。それに気付かないまま逝かせてあげたいから黙っていた。

「ほんま世の中間違ってるわ。ぜーんぶ間違ってる。俺、こんな世の中でも生きてたいんかなあ。なんかほんまに生きる気力失せてきたわ。」

いや、あかん。やっぱり人間を喰うなんておかしいわ。間違ってる。俺はそんな奴らの食糧になんかならへんぞ！」

「俺はあいつらの言ってることは正論だと思う。命が命を踏み台にして生きるのは当然のことだ。イクジだって肉は喰うだろ。人間は食べちゃいけないって教えられてきたから間違ってるって思うだけなんだ。もつとよく考えてみるよ。生き物は何かの命を喰わないと生きていけないんだ。自然の摂理だよ。人間だけが食糧になり得ないって理論は間違ってる。自分が喰われたくないからそう言うだけだ。」

命は皆平等だ。シャチョーがそう言ったとき、俺は心から共感していた。そして今まで食べてきた命たちに、心から「ご馳走様」を言っていた。俺のこの理屈がイクジには到底理解できるものではないだろうが、これから喰われる者として最低限の心構えはしておいてほしいと思っただ次第です。反論でも何でもしやがれい。

「うん。そやなあ。認めたくはないけど確かにそうや。理屈ではそやな。間違ってる。キー坊が言うように、シャチョーが言うところとは正論や。俺が肉を喰うように、あいつらも肉を喰う。それは分かった。分かったんやけど……。けど、あのジチョーってやつは気に食わん。絶対あいつにだけは喰われたくない。飯を喰う時は絶対に食材に感謝しなあかんもんやろ。あいつはそんな心持つとらへん。そんなヤツに俺の肉はやれんな。」

同感だ。俺もあいつは好きになれない。でも喰われようが喰われまいが俺には知ったこっちゃない。

「何にせよここから抜け出さんとな。」イクジは希望を捨てていない。しかし日はそろそろ傾きかけている。この絶望的な状況をどう切り抜けるんだい。もう不可能だよ。もうやめろよ。考えるのはやめろ。何も考えるな。ほら、俺はこんなに平安だよ。苦痛なんかひ

とつもないぜ。何も考えるな。この今をただ感じる。そうしたら楽になるんだよ。なあ、もう考えるな。そんな顔をするな。早く楽になろう。

イクジはずっと考え込んでいる。大塚食品の社員は、たまにやってきてはハンチヨーに何かしら文句をつけて蹴ったり抓ったりしている。ハンチヨーは攻撃を受けても死んだ眼のままじっとしている。俺は再び腰を落とし、感覚を失った両手をグーパーしている。景色がだんだん赤みを帯びてきた。長かった昼が終わろうとしている。

イクジが最後の無駄な足掻きを始めた。

「ハンチヨー、ちょっとー。何でそれだけコケにされて黙っとんねんな。悔しくないんか。いっぺんぐらいどつき返したれや。情けないおっさんやのう。」

やっぱりハンチヨーは反応してくれない。ぴくんとも動かない。「ハンチヨーって前はフクシャチヨーやったんやろ？なんで降格したんさ。気が弱いからか？もうちょい根性見せたれよ。ほんまの自分でいけよ。ハンチヨー、オイ。」

やっぱりハンチヨーは反応してくれない。ぴくんとも動かない。「なあ、ハンチヨー。俺らと一緒に逃げよう。あんたかていつまでもこんな生活いややる。」

いつも我慢してんのとちゃうんか。こっから出て解放されよう。あんなやつらと一緒にあったって、あんたの人生はおもしろないままや。な、どうや？まずは俺の手を括ってる縄を・・・」

ハンチヨーが急に立ち上がったからイクジは吃驚して口を止めた。ハンチヨーはそのまま歩いて来て、槍をイクジの喉に突き立てて構えた。表情は変わらず。

イクジの喉仏が上下した。恐怖のせいで震えている。陰茎がぶるぶると前後に揺れている。

「ごめんなさい。イクジは青ざめて、苦しそうに、慎重に呼吸し

ている。

「そいつ逃がしてやってくれ。」そうだ。そうしてくれたら全部解決するじゃないか。駄目なのは分かっているが、そうハンチョーに頼むしかなかった。「頼むよ。何なら一緒に逃げてやってくれ。俺がシャチョーとかに適当なこと言っというてやるからさ。」号令でもかけられたかのように、ハンチョーの槍のターゲットは一瞬にして俺に向けられた。生気を感じられない眼差しで俺を睨みつけながらハンチョーが近づいて来る。近づいて来る。ゆっくり近づいて来る。槍の先が俺の喉のすぐ前にやってきた。槍の先は雲母のような黒くてかてかとした石。武器としては十分殺傷能力は有りそうだ。カモン。イエカモン。

初めてこんな間近でハンチョーを見た。やっぱりこのおっさんの眼は死んだ魚の、あれ、あれ？なんか眼がだんだん生き返っているよ。なんか切なそうな眼をしているよ。切ない眼で俺を見ているよ。なんか俺もハンチョーを見ていると切なくなってきたよ。なんか懐かしいような、なんかおかしな気持ちだよ。って思ったけれども、気のせいかな。やっぱり死んだ魚の、あらら、あれ？やっぱりおかし。死んだ眼ではない。もともと死んでなかっただけなのか。おつと、やっぱり死んでる。生きてない。うん。いずれにせよ、俺には無関係。興味が無い。わけでもないが、どうでもいいや。

「俺を殺せ。そのまま突いてくれよ。で、俺を食えばいいじゃないか。あのフリチンは家畜にしてさ。俺は死にに來たんだ。今すぐ殺してくれ。ちゃんと骨まで食ってくれよ。死体は見られたくないからな。」本当にそうして欲しいんだ。俺は死ぬるし、あいつらは大好きな人肉が喰えるし、イクジは生き延びられるチャンスが出来る。これにて一件落着つてのは駄目ですかい。ハンチョーさんよ。ハンチョーさん、ハンチョーさんの顔がまたおかしくなってますよ。とても悲しそうな、怒っているような、泣き出しそうな、なんとも形容しがたい表情。俺をまっすぐ見つめている。俺もハンチョーを見

つめている。俺もきつとおかしな表情になつてる気がする。ハンチヨーの顔を見ているうちに、この男をずっと昔から知っているかのような錯覚に陥ってきたからだ。変な顔のままふたりは見つめ合っている。そして、ハンチヨーは唇を震わせて、初めて口を開いた。

「そんな、悲しいことを言っんじゃない。」

ぎよつとした。その声がとても低くて深くて優しかったからか、その発言が意外なものだったからか、口臭がヤバかったからか、その全部か、はつきりとは判断できないが、隠せないほど俺は動揺している。しかし、それを悟られまいと無理やりにニヤついた。

「言っんじゃない。」また、静かにハンチヨーは言った。そして雲母の槍を収めて定位置に戻り、再び胡坐をかいた。向こうを向いている彼の眼は、今も死んでいるのだろうか。

居心地の悪い静寂が続き、遂に日没を迎えた。

本日二本目

松明を持った（有）大塚食品の面々が横並び。縛り付けられた俺たちの目の前に立っている。俺とイクジを挟むようにして、両脇に小さな松明が立てられている。宴の前に儀式ってか。赤色系の怪しい、異様な雰囲気がこの一帯を包んでいる。イクジは眼を瞑ってうつむき、もう終わったなあって顔をしながらも、後ろで縛られている手をぐねぐねと動かしている。俺は腰を下ろしてじっとしている。相変わらず腕は突っ張って、地味に痛い。

「えー、それじゃあ早速始めましょうか。」ジチヨーが恵比須顔で言うと、シャチヨーはゆっくり、大きく頷いた。「えー、まあ今回も、ハンチヨーに最初のひと突きをお願いしたいんだが、えー、どうだろう。」なんと憎たらしい言い方で、ジチヨーは社員たちに同意を求めた。「異議なし。」と全員が揃って返した。カチヨー、カカリチヨーは「今度こそやってくれよ。」「しっかりと腰抜け。」なんて野次を飛ばす。ハンチヨーはゆっくりと俺たちの前に立った。生の光を帯びない眼で、ずっと向こうの闇を見つめるように真っ直ぐ前を向き、腰を低くして槍を構えた。一見安定しているような構えだが、実際腰は退けている。

「えー、まあ、無理だったらいつでも言ってくれ。私が代わりにやっつてあげるからね。まあそんなへっぴり腰ではまあ無理だろうな。まあ今まで一度たりとも出来なかったんだ。今回だつて無理だろうよ。はっはっはっ。」厭味な言い方はジチヨーの得意技。ハンチヨーもよくこんなヤツと一緒にいられるものだ。俺だつたら絶対無理だな。ハンチヨー、遠慮なくやつちやいな。俺を突きなよ。そいつら見返してやんなよ。でもハンチヨーはへっぴり腰のまま足がすくんで動けない様子。槍の先の雲母が、ぴぴぴと小刻みに震えている。

二分ほど経つただろうか。全くこの儀式に進展は無い。社員たちは次々にため息を吐き出している。「早くしろ。」と言うやつもいれば、ハンチヨーめがけて地面の砂を蹴り上げているやつもいる。イクジは縛っている紐を解こうと必死だ。ジチヨーは何か言おうとしてハンチヨーに歩み寄った。

その時、ハンチヨーの構えが変わった。雰囲気からして、まっしぐらにイクジに槍を突き刺そうとしているのが察せられる。ジチヨーは「ほお。」と声をあげた。遂にハンチヨーは動き出した。矛先はイクジの中心辺りを狙っている。標的のイクジは、さらに動きを大きくして意地でも抜け出そうとする。安定した歩行でハンチヨーが迫る。イクジは叫ぶ。「やめてくれええ！」ハンチヨーとイクジの距離が縮まる。フィニッシュか。

・・・ぶつつ。何か千切れたような音がした。なんと俺の手を縛っていた紐が切れたのだ。こんな絶妙なタイミングで切れたのだ。こんな絶妙なタイミングで、俺の手は自由になってしまったのだ。完璧に無意味。俺が自由になったところで、何もする気が無いのだから。しかし急に切れたもんだから、思わずああっと声が出た。ふつつと音と、ああって声で、この場の全員の視線が俺に集中した。予想外の出来事で、時間が止まったって思うぐらいの静かな沈黙が生じた。俺はゆっくりと立ち上がり、両手を上に挙げた。万歳だとか、降参だとか、そんな意味ではなく、久し振りに自由になった手を労わりたかったから。

「別に俺は逃げないよ。何でもいいから早く俺のこと殺してくれよ。」びいんと伸びをしながら、かつたるそうな顔で言っちゃった。ハンチヨーがまたあの表情をしたかのように見えたが、暗くてちゃんと見えないから本当はどうかかわからない。どうかかわらないが、槍は未だにイクジを指している。俺の提案は却下ってわけだ。ハン

チヨ―はまたイクジの方を向いて進んだ。イクジの動きはもう凄まじく「どらああ。」なんて怒声を上げている。最後の最後まで諦めない男イクジ。ハンチヨ―は構えた槍を少し後方に引いた。さあ、ハンチヨ―の初フライトだ。

しかし、イクジは槍を突かせまいと、縛られた樹を中心にぐるぐると回り始めた。「分身の術！」なんて訳のわからないことも言っている。見事なまでの悪足掻き。天晴れ、としか言いようがないね。是非とも肖りたいものだ。だが、ハンチヨ―は冷静に狙いを定めている。きっとあの死んだ眼で、無情にこの若者を殺すのだ。ああ神よ。お救いくださいまし。ラヴアンドピース。アアメン。

「走れ。」

小さな声で、誰かが言った。その声が聞こえた次の瞬間、ハンチヨ―は力を込めて槍を突き出した。

ぶっつ。

ハイ、本日二本目。イクジの手を縛っていた紐が切れた。もう、樹に縛られている者は誰も居なくなつた。

「走れ！」

ハンチヨ―が叫んだ。いきなりなこと、状況が把握できないイクジであつたが、手が解放されるやいなや、暗い森の奥目掛けてまっしぐらに突っ走つた。

「走れ！」

俺の方を向いてそう言うんだけど、俺はどうして走らないといけなのよって思う訳だから・・・と思つている間に、ハンチヨ―に襟首を掴まれて引っ張られて、イクジの後を追うようにこの場所を離れた。

気が付けば俺も走っていた。理由は分からないけど、必死で追いかけてくる（有）オオツカ食品に追いつかれまいと努力しているのだ。手も足も痺れていて正直きついが、何故か頑張っているのだ。松明から遠ざかり、真っ暗になってゆく森。目の前や、足元の障害物が見えずにぶつかったり、つまずいたり。

そんなこんなで、すぐ後ろで聞こえていた足音が止んだ。振り返ってみると、シャチョーがハンチョーの前に立ちはだかっている。シャチョーは松明で、ハンチョーは槍で、お互いを威嚇しているようだ。社員たちは少し後方でそれを見ている。イクジは一番遠くから二人の対峙を眺めている。

なんだろう。全身がどくどくと波打って、ひんやりとした心地の悪い汁が、脇の下からぽつぽつと落ちた。なんなんだろう。動けないんだ。動こうと思えないんだ。

あの二人はじっと向かい合ったまま動こうとしない。誰も動かず、誰も何も言えず、ただほのかに揺れる松明の炎が、うつろな放射状の影を揺らめかせているだけだ。



仮面ハンチョー（前書き）

いきなりですが、最終話です。未完の完です。

仮面ハンチョー

私がここに来てから、もう七回目の夏。ただただ毎日を繰り返しているだけなのに、七年経ったということがはつきりとわかる。(有)オオツカ食品は早六周年。いつも心掛けていることは、平穩に波風立てず、平凡に。物心ついたときから、九割九分はそうしている。それなのに、これはどういうことだ。勤続六年。真面目に働き、貢献し続けたわが社を裏切り、社長に刃を向けている。何故こんなことになるのだ。意識が遠くなる。今、私は此処に存在しているのか？私は生きているのか？

裕福ではない家庭で育った。両親も裕福な心の持ち主ではなかった。家庭では毎日のように争いがあり、自分には居場所が無い。といつも感じていた。唯一優しくしてくれた姉も、そんな両親のことを憎んでか、家に居ることは少なかった。何か口を開けば喧嘩が起きる。目立ったことをすれば酷く罵られる。だから、私は、無口で静かな人間に成りすまして生きてきた。しかし、そう長く耐えられないものではない。成人するやいなや結婚し、逃げるように家を出た。妻と、ひとり息子と、私と三人の核家族。あの惨劇を繰り返すまいと、必死で立派な父親に成りすまそうと努めた。決して腹を立てず、争わず、和やかに。妻はよく「あなたと一緒にあって本当に良かった。」と、言っていた。その言葉を聞くたびに胸が痛んだ。自分はそんな善い人間ではない。本当の自分は、あの両親のように醜いのだ。その醜さを隠しているだけなのだ。争いたくなかったから。妻と息子の笑顔を護りたかったから。平安な世界で暮らしたかったから。しかし、そう長くは耐えられなかった。私の仮面にヒビが生じ、愛すべき、か弱き者に手を上げるようになった。それがどうしても許せなくなり、子どもが小学校に上がる少し前、逃げるように

家を出た。護れなかった家族が、どうにか幸せになりますようにと祈って。

死ぬつもりだった。樹海の奥で首を吊ろうと決めた筈だった。しかし、なんたる偶然か。十代の頃、かつて親友と呼んでいたオオツカという男にばったりと遇ってしまった。生気を失っていた私を彼は無理やりに引き摺って、促されるまま、流されるまま、小さな食品会社に入社させられた。壮年の社長と、オオツカと私。そしてパートが数名。食品会社といっても、ソーセージを製造するだけの小さな工場。欠員補充するまでちよつとの間だけ。と、無理矢理ハードな業務を押し付けられたが、いつもの仮面を被り、真面目に何年も働き続けた。家族を捨ててからの私は、心を持たぬ機械のようだった。

私がソーセージ製造マシンに成ってから七年経ったある日、社長が脳出血で亡くなった。何から何まで独りでやっていた人が急にいなくなったものだから、当然工場は機能しなくなった。それなのにオオツカは「立て直してやる。」などと言い、無謀にも先代の後を継いだ。私も副社長となり、精一杯サポートした。

七ヶ月程もがいた。二人の努力も空しく、残ったのは莫大な借金だけだった。なんと世知辛い。私の仮面はより一層色彩を失っていた。そしてオオツカに促されるまま、流されるまま、あの日来るはずであった樹海に足を踏み入れた。

数日、何も口にしていなかった。首吊り用のロープは用意していたものの、それを使う前に絶命しそうなくらい衰弱しきっていた。途中、落ちていたウイスキーを半分ずつ飲んで、二人とも歩けないほどふらふらになりながら薄暗い樹海を進んだ。

かなり無茶をして、随分奥まで来た。もうこの辺りでいいだろう。そう思った時、少し先でロープに首をかけようとしている若い女性が見えた。ロープを近づけたり離したりと、躊躇っているようだった。

た。二人でその光景を眺めていると、女性は私たちが居ることに気付いたらしく、険しい表情でゆっくりと歩いてきた。

「……殺してください。」

震えながら、彼女は言った。まだ死を躊躇っているようであった。私はどうしていいのかわからず、ただ首を横に振っていた。しかしオオツカは躊躇わずに、持っていたロープで彼女の首を力いっぱい締め上げた。思わず眼を伏せた。すぐそこで、声にならない声が聞こえた。「イヤ」と言っているようだった。間もなく彼女は天に昇った。私とオオツカも、彼女の傍に倒れこんだ。

オオツカがぼつりと言った。

「腹減ったなあ。」

もつと小さく言った。

「これ、喰えるかな。」

私はもつと小さく言った。

「さあね。」

精神もかなり磨り減っていたのだろう。気が付けば私たちは死肉を喰らっていた。新鮮で暖

かな肉を咀嚼し、嚥下しては、大量の涙を溢しながら嘔吐し、それを繰り返した。みぞおちから咽頭にかけての不快感と、涙目に風が当たる爽快感が高周波のエネルギーとなり、狂気を形成した。

嘔気を克服し、満腹になったオオツカが言った。

「生きていける。自殺を幫助して、そいつを食えば生きていける。何も死ぬことなんてないんだ。・・・オオツカ食品、ここに旗揚げだ。」

なんと恐ろしい組織だろう。一瞬そう思ったが、私という人格にぴったりと張り付いてしまっている仮面に従うほかに道は無かった。

未完。

仮面ハンチョー（後書き）

・ビオトープを読んで下さった皆様へお詫びとお礼とお願い。

このたびは「ビオトープ」を読んで頂き、誠に有難う御座いました。

この「ビオトープ」は、僕が初めて書いた作品です。数年間温めていたネタを、手探りで文章にしていきました。しかし書けば書くほど、自分の拙さが浮き彫りになっていくのを実感しました。自分の思考に、自分の表現力がついていけないもどかしさでいっぱいでした。

温めて温めてきたものなだけに、もつとすっかりした形で書きたい。そう思い、この時点で断念しました。

途中でやめてしまうことは、読んでくれる方々に対してとても失礼なことです。大変申し訳ないです。しかし初めて書いたもの。一生懸命書いたものに対して、第三者の意見がほしい。と欲が出てしまいました。

もしよろしければ、意見、助言、感想など戴きたいので宜しくお願いします。今後の参考にさせて戴きます。

いつになるかは分かりませんが、力をつけて続きを書きます。もしお目にかかることがありましたら、その時も読んで戴きたいと思えます。

こんな拙い文章（しかも未完）を読んで戴き、心よりお礼申し上げます。

井上
讚恥

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8776a/>

ビオトープ

2010年10月25日09時23分発行